芭蕉元禄事業　奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年四月度　入選句（投稿総数千二百六十三句・一般投句数八百十句）

特選

選者　名和　永山

うす墨を湛へてまどか老桜　岐阜市　堀江　美州

一読して「薄墨桜」が頭をよぎる。薄墨桜の花弁は、蕾を開くときにはピンク色であるが、咲いて日がたつとだんだん白色に変わる。散る間際には、花弁に薄墨を塗したかのような色となる。そのことは「うす墨を湛えて」の措辞でうまく言い当てている。その色は、まろやかな落ち着きのある色「まどか」である。樹齢一五〇〇年の桜の木であるが、下五の「老桜」そのものである。

里山の風まだ硬し斑雪　養老郡養老町　田中　紫香

季語は「斑雪」で春。春になっても所どころに雪が残っている状態をいう。「里山の風まだ硬し」のフレーズで、「風の硬さ」が何ともいえない余情を醸し出している。「水の硬さ」という言い方も、単なる水の冷たさだけではなく、人に手に触れがたい思いがする。そして、下五の「斑雪」という季語につながると、里山の情景に一段と「まだ来ぬ春」を思い浮かべることができる。

「場所」「情景」「季語」といったそれぞれが、機能的なかかわりを持ち、たった十七音で、豊かな詩（うた）に仕上げている。

佐保姫のリップクリーム風ひとつ　埼玉県所沢市　獅子谷　雪

季語は「佐保姫」で春。「佐保姫」とは、春をつかさどる女神として季語に位置づけられている。古代中国の五行説に、春は東方に配当するとありますから、この説を取り入れた我が国では、平城京の東に位置する佐保山を「春」の位として、この山を神格化したところから佐保山の女神を佐保姫と呼ぶようになり、春の季節神と言われるようになったのです。

入選句は「春の女神がリップクリームを塗った」のでしょう。女神がそのようなことをすることはないのでしょうが、俳句では「佐保姫」は、春を待っていた女性と捉えてもいいのです。そこに爽やかな春の風が一吹きした。春の明るさが「佐保姫」によって浮き立ってきます。

秀逸

犬ふぐり踏んでゆく君反抗期　大垣市　棚橋　みさを

リラ冷えや手斧削りの太柱　山梨県北杜市　福田　すみ江

タクシーのシートに沈む花疲れ　静岡県藤枝市　増田　弥生

古傷のときをり疼く遅き春　大垣市　吉田　てるみ

校門でママの手ぎゅっと初桜　大垣市　石田　仁生

花の道えらんで今日の万歩計　大垣市　北浦　典子

伊吹嶺の肩抱くやうに春夕焼　岐阜市　小湊　順子

山葵田の水音軽く蒼天に　大垣市　谷　彩虹

春の日を入れて鋤き込む漢の背　大垣市　田中　雅子

少年の真白き心辛夷さく　三重県四日市市　後藤　允孝

入選

卒業歌唄う少年変声期　大垣市　棚橋　みさを

斑雪やはらかき陽と交りぬ　安八郡神戸町　大槻　恭子

春日差し庭のすみまで届けをり　大垣市　岩田　美鳥

春灯もれ赤子と母の八畳間　大垣市　平野　ヒサヱ

夕暮れにふらここだけがゆれてをり　大垣市　吉田　てるみ

奥座敷笛や太鼓にひいな舞う　大垣市　松岡　みつ

つちふるや墨絵ぼかしの大伊吹　不破郡垂井町　中嶋　笑子

空耳に言葉を返す四月馬鹿　大垣市　片山　洋紅

リラの香や茶房の声の賑やかし　大垣市　谷　睦月

うす紅のほどけてうるむ初桜　岐阜市　島　めぐみ

入選

花の城三英傑に紙ふぶき　岐阜市　伊藤　瑞実

見送りのテールランプや春月夜　大垣市　小林　千代

この先は大河と知らぬ花筏　大垣市　平野　きぬよ

今年ほど花待つ年はなかりけり　大垣市　野原　冨美

隣家より沈丁の香とピアノの音　揖斐郡池田町　木塚　しょう

一字づつ春を呼び寄す写経かな　不破郡垂井町　竹嶋　富美子

船頭と一会の縁花の旅　愛知県北名古屋市　杉村　俊治

落款の逆さに押され四月馬鹿　大垣市　臼井　秀子

付け睫片方さがす四月馬鹿　大垣市　野村　多佳子

神馬一気に駆け上がる春の山　大垣市　高田　雅章

選者吟

ニュートンに欺き散るる桜かな　永山